

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02735

研究課題名（和文）現代日本語の自他に関する構文的研究

研究課題名（英文）Study on Intransitive and Transitive Verb Constructions in Modern Japanese

研究代表者

福島 みどり（天野みどり）（AMANO, Midori）

大妻女子大学・文学部・教授

研究者番号：10201899

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：実際の言語使用場面では、逸脱的な特徴を持つ文も出現する。そうした文の生成や意味理解には構文的知識が重要な役割を果たすということを、逸脱的な自動詞構文・他動詞構文の考察によって明らかにした。

逸脱的な「のが」「のを」の文は、ともに逆接を表すように見えるが、それぞれに自動詞構文が持つ「変遷的な」意味、他動詞構文が持つ「対抗動作的な」意味を引き継ぎ、その意味から離れるのに従って、許容度は落ちるのである。

こうした逸脱的な特徴を持つ文の意味理解に関する非母語話者との比較調査から、母語話者は構文的知識を鋳型とし、柔軟な意味理解をすることも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

構文全体に慣習的に固着している意味の問題やその意味からの拡張の問題について、現代日本語の基本的構文である自動詞構文・他動詞構文により考察することは、日本語の観点から普遍的な構文研究理論を構築するために有益である。

母語話者は構文的知識を鋳型として用いて柔軟に意味理解するのに対し、非母語話者は、上級日本語学習者であっても構文的知識を規範としてのみ捉え、柔軟な解釈をしないという調査結果は、構文的知識研究から外国語教育のありかたに対して貢献するところがある。

研究成果の概要（英文）：In actual language usage, sentences with extraordinary features also appear.

By studying intransitive and transitive verb constructions that have such characteristics, it was clarified that constructive knowledge plays an important role in the generation and semantic understanding of such sentences.

The sentences "noga" and "noo", which have exceptional features, both seem to represent "reverse connection", but they have different meanings. That is, the former has the meaning of "changing" that the intransitive verb constructions have, and the latter has the meaning of "opposing movement" that the transitive verb constructions have. As they move away from their meaning, the acceptability of those sentences decreases.

From a comparative study with non-native speakers, it is clear that the native speakers use constructive knowledge as a template and have flexible meaning understanding.

研究分野：日本語学

キーワード：構文 自動詞構文 他動詞構文 ノヲ ノガ 逸脱 逆接 容認性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 構文の全体性に着目した研究は主として欧米言語を考察対象として盛んであったが(文献 )、日本語学分野でも従来の構文論の流れの中から構文の全体的意味やその拡張を明確な形で考察する一群の研究が出始めた(文献 )。内外で、構文とは何かに対する議論が活発になり、本研究の構文的知識の役割を追究する考察の重要性が増した。

(2) 従来、逸脱的な特徴を持つ文の考察は周辺的な研究としてその意義が理解されにくい状況であったが、意味拡張を積極的に考察する構文研究の隆盛により、実際の言語使用場面に現れる様々な逸脱的文が考察対象として認識され始めた。

## 2. 研究の目的

(1) 第一の目的は、日本語の自動詞構文・他動詞構文の基幹的な意味を実証的に明らかにし、実際に現れる様々な逸脱的自動詞文・他動詞文の意味を、構文の基幹的な意味との関係で詳細に記述することである。

(2) 第二の目的は、日本語の自他構文の分析を通し「構文」という単位の持つ形式と意味の慣習的結び付きに関する知識が実際の言語使用の場面での意味生成・理解のプロセスに重要な役割を果たすことを明らかにすることである。

(3) 第三の目的は、逸脱的ながらも実際に意味生成・理解をする母語話者の柔軟で創造的な言語運用のあり方を、非母語話者との比較により明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

(1) 逸脱的な「のが」「のを」の文の他、比較考察をするための「ところが」「ところを」の文や「ものが」「ものを」の文、連体修飾節の文などの実例を収集する類似した意味の文の違いや、流れの中でどのような意味に解釈できるかを実証的に研究する。

(2) 実証的研究方法により得られた日本語の自動詞構文・他動詞構文の拡張に関する知見を、言語普遍的に論述するために、構文に関し、様々な立場から提案される理論的枠組みを精査する。

(3) 母語話者の構文的知識の運用の特徴を明らかにするため、日本語母語話者と日本語学習者を対象に、逸脱的文の意味理解や容認性判断の調査を行う。

## 4. 研究成果

(1) 2つの逸脱的な文の自動詞構文の意味と他動詞構文の意味について

「のが」「のを」を持つ文の中には、例 のように、結びつき先である動詞述語句がその後続に無いものがある。これらの「のが」「のを」は、「の+主格・対格助詞」のひとまとまりが接続助詞化しているとされることがある。

入院中は、毎日のように彼女が見舞ってくれた。(中略)それでも、心細さは消えなかった。都内の実家を離れ、一人暮らしを始めて3年目。ろくに実家に帰ることはなかったのが毎日、病院の公衆電話から家族の声を聞いた。太郎は午前中は日が照っていたのを午後になって雨が降り出してから出て行った。

本研究ではこうした文の容認性が下がることから、これらを逸脱的な「のが」「のを」の文と呼ぶ。この種の逸脱的な「のが」「のを」の文の実例を「現代日本語書き言葉均衡-コーパス」や公刊された書籍・新聞・広告文から収集し、その実例考察によって詳細な意味記述を試みた。

文脈を含めた実例考察の結果、逸脱的な「のが」の文は、自動詞構文の表す、ある状態から異なる状態へと変化する 状態変遷性 の意味を受け継いでいること、逸脱的な「のを」の文は、他動詞構文の表す、ある方向性を持つ事態を遮ったり押しとどめたりする 「対抗動作性」の意味を受け継いでいることが明らかになった。

(2) 構文的観点から見る接続助詞的な意味の派生について

実証的考察によって、逸脱的特徴を持ち、接続助詞的な意味を表す「のが」と「のを」の文を、自動詞構文・他動詞構文からの拡張と位置付けた上で、自動詞構文・他動詞構文の基本的な意味の受け継ぎの程度、逆に言えば、どこまで元の意味を失っているかを詳細に検討した。

収集した実例の観察の結果、「のが」「のを」は、 状態変遷性 を表す自動詞構文の主格、対抗動作性 を表す他動詞構文の対格という格助詞の意味から、二つの事態を 逆接 対比 の意味で連結するものへと拡張した実例が見いだされた。

ただし、自動詞構文・他動詞構文の特徴が失われるにつれ、文の容認度は下がり、特に、動的事象の変化の解釈が得られない状況での 逆接 対比 の用法は、かなり受け入れがたいものであることが、母語話者に行った容認性判断調査により明らかになった。

以下の「のを」は逸脱的な「のを」の文だが、下線のように後続に動的事象が表される「の方が」、名詞化された「よりも」容認度は高い(容認度は「問題なく容認」を2点、「やや容認度が下がる」を1点、「全く容認できない」を0点とした平均点で表す、例文冒頭の数値)。また、「のが」の文は元々状態変化を表す自動詞構文であることから、「のを」に比べて容認度は問題なく高い。

(1.36) これまでロシア経由であったのを、今回の旅では初めてウイーンを経由することになった。

(0.84) これまでロシア経由であったのを、今回の旅では初めてウイーン経由になった。

(1.76) これまでロシア経由であったのが、今回の旅では初めてウイーン経由になった。

拡張の結果としての逸脱的な「のが」の文と「のを」の文の意味は接近しており互換性があるように感じられるが、それぞれに自動詞構文・他動詞構文の意味を引き継いでいることが、容認度の違いとしてもわかる。

「のが」「のを」を用いて動的事象変化ではない、対比を表す場合、発話者は自動詞構文・他動詞構文の構文の意味である「変化」の意味を、《対比する》という思考のプロセスに写像して表現したものと考えられ、「に対して」などの表す対比とは意味が異なることを明らかにした。

逆接や対比の意味そのものが発話者の主観と言われるが、その逆接対比の意味を、自動詞構文・他動詞構文の持つ構文の意味を鋳型とする、主体的な捉えによって表現するという意味でも、「のが」「のを」文の逆接対比は主観的であると言える。

### (3) 構文研究の理論的整理と問題点の指摘について

本研究では、日本語文法論研究史から構文研究の流れを整理した。さらに、構文理論を日本語の自動詞構文・他動詞構文の拡張の他、連体修飾節構文、恩恵構文などの考察結果から精査し、理論的主張の妥当性を再検討した。

例えば、日本語の恩恵構文「～てもらう・～てくれる」は、「～てもらわないと・～てくれないと」という中断した形(中断節)で、対人関係的な行為要求の意味(＝聞き手に行為をさせる意味)を派生する。

「やっぱり組織の中にいる以上は、従ってもらわないと…」と、何度か忠告されたことがあります。

「やっぱり組織の中にいる以上は、従ってくれないと…」と、何度か忠告されたことがあります。

この用法は互換可能に見えるが、実際の使用例調査の結果、その使用数は「～てもらわないと」に傾いていることがわかった。

表1 テモラワナイト・テクレナイト使用例数(現代日本語書き言葉均衡コーパス調査)

	c テモラワナイト	d テクレナイト	c+d 計
a 完全文	190 (68.8%)	134 (80.7%)	324
b 中断節	86 (31.2%)	32 (19.3%)	118
a+b 計	276 (100%)	166 (100%)	442

この使用の傾きの理由を、語彙論・統語論・語用論のレベルで考察し、元々の「もらう」が持つ相手に乞う意味が保持されていること、「～てもらう」は発話者が主格となり発話者の意志的動作を表すが「～てくれる」は表さないこと、自身の動作を評価する意味を表すことにより、相手の行為を要求する無礼さを軽減することが考えられるとした。

従来、「～てもらう」と「～てくれる」では「～てくれる」の方が構文の意味拡張が進んでいるとされるが、「～てもらう」の方に促進的な用法があることを述べ、構文の意味拡張の要因・傾向が複雑であること、事例調査を十全に行うことが、構文の拡張の方向性を理論的に論じるのに不可欠であることを指摘した。

### (4) 母語話者と日本語学習者の意味理解の異なりの指摘

逸脱的な「のが」「のを」文の意味理解に関し、母語話者と日本語学習者に調査した結果、上級学習者ほど、むしろ逸脱的な「のが」「のを」文の意味理解ができず、母語話者の意味理解とかけ離れる場合があることが明らかになった。

例えば例の「それが」の用法に関する容認度調査では、日本語母語話者は1.27と容認性は満点の2点よりは落ちるものの少し不自然さが感じられる程度であるのに対して、日本語学習者は初級・中級・上級になるにつれて容認度が落ち、上級者に至っては0.25と、ほとんど容認不可能なほどに低下した。

10 年ほど前までのドイツは恵まれた体格を生かしたサッカーが特徴だった。それが、ここ数年は技術のある選手が増えた。

この、母語話者と上級者の差はかなり大きい。おそらく、日本語学習者には、主格に関する構文的知識が初級・中級・上級となるにつれて規範として身につけており、その結果として逸脱の特徴を持つ例に対し厳しい判定を下しているものと考えられる。

こうした調査結果から、母語話者は構文的知識を「鑄型」として用いて、逸脱的な事例に遭遇したときに類推を働かせた柔軟な意味理解をするのに対して、日本語学習者は、上級になるほど、構文的知識を「規範」として捉え、逸脱する事例の意味理解を拒むものだという、言語運用上の違いに関する仮説を示した。

この点は、逸脱的な事例を考察対象とした本研究の、教育界への貢献の可能性を示唆するものであり、本研究終了後も引き続き考察し検証を重ねていく予定である。

#### 引用文献

Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford University Press.

益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』 くろしお出版

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 天野みどり	4. 巻 51
2. 論文標題 接続助詞的ノヲとノガの接近に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大妻女子大学紀要 - 文系 -	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野みどり	4. 巻 50
2. 論文標題 逸脱的ノヲ文の 他動性 と 対比性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大妻国文	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野みどり	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 書評 早津恵美子著『現代日本語の使役文』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 天野みどり	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 書評 野呂健一著『現代日本語の反復構文 - 構文文法と類像性の観点から - 』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 56-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 天野みどり	4．巻 -
2．論文標題 逸脱的「それが」文の意味解釈	5．発行年 2016年
3．雑誌名 日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ	6．最初と最後の頁 320-342
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 天野みどり	4．巻 -
2．論文標題 統語構造の異なりと意味 - 竹沢論文の類例の検証 -	5．発行年 2016年
3．雑誌名 日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ	6．最初と最後の頁 77-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 天野みどり	4．巻 -
2．論文標題 母語話者と非母語話者の逸脱文の意味解釈	5．発行年 2016年
3．雑誌名 日本語文法研究のフロンティア	6．最初と最後の頁 127-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 天野 みどり	4．巻 -
2．論文標題 日本語の実例に対する文法性判断について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 2019 CAJLE Annual Conference Proceedings	6．最初と最後の頁 24-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 天野みどり
2．発表標題 接続助詞的ノヲとノガの接近
3．学会等名 CAJLE（Canadian Association for Japanese Language Education） 2018 年次大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 天野みどり
2．発表標題 構文と意味の拡がり - 総論
3．学会等名 日本語文法学会第17回大会パネルセッション
4．発表年 2016年

1．発表者名 天野みどり
2．発表標題 構文の意味派生の推進と抑制 テモラウ構文とテクレル構文を例に
3．学会等名 国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア 形態論・意味論・統語論を中心に」（招待講演）
4．発表年 2017年

1．発表者名 天野みどり
2．発表標題 日本語の実例に対する文法性判断について
3．学会等名 CAJLE（Canadian Association for Japanese Language Education） 2019 年次大会
4．発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1．著者名 天野みどり・早瀬尚子	4．発行年 2017年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 247
3．書名 構文の意味と拡がり	

1．著者名 天野みどり・早瀬尚子	4．発行年 2020年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 -
3．書名 構文論文集（仮）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----